奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「当たり前」をつくる

横浜市立大綱中学校　3年　深堀（ふかほり）　絢心（あやみ）

東野圭吾さんの「片想い」という本を読んだことがあるでしょうか。私は最近この本を読み、衝撃を受けました。この本の中で鍵を握っているのが、「性同一性障害」のことなのです。きっと、一度は耳にしたことがある言葉だと思います。これの何が衝撃なのか、とも思うかもしれません。この本が刊行されたのは、2001年なのです。日本で性同一性障害特例法ができたのは2003年。WHOが国際疾病分類の精神障害の項目から性同一性障害を除外したのが2019年です。分かったでしょうか。「片想い」は世界を先取りし、未来を見通したような作品なのです。2001年当時、性同一性障害というのは、誰もが聞いたことがある単語ではなかったんですから。

当たり前ではないことにアンテナを張る。少数派に目を向ける。「当たり前を疑い、よりよい当たり前をつくる」ことにこそ、社会をよりよくする鍵があると思います。ここで言う当たり前とは、大多数の人に共通する考え方とします。では、今の「当たり前」は、よりよい当たり前とは、なんでしょうか。

1945年8月6日、午前8時15分、原爆投下。日本の誰もが知っている日時です。世界で唯一原爆が投下されたこの国で生きているからこそ、私たちは平和について、何度となく考え、感じています。「二度と戦争を引き起こさない」。これが、今の日本の中学生の一つの「当たり前」の形です。太平洋戦争中は、国のために命を懸け、戦争をすることが「当たり前」でした。もちろん、心のどこかでおかしいと思っていた人もいましたが、大多数の人はそういう考え方の人を非国民として迫害していました。このように、時代や風潮によって「当たり前」は変化しています。

2022年2月24日から始まったロシアウクライナ戦争。今もロシアはウクライナを攻め続けています。私は、戦争は決して過ぎ去った出来事ではないのだと思い知りました。戦争の悲惨さを、日本では小学生でも知っているのに、なぜ戦争するのでしょうか。政治的に、とかいろいろあるのでしょうが、そんなこと関係ありません。今、この瞬間も、家族と離れ離れになっている人がいます。たとえ原爆が落とされた国でなくとも、2回に及ぶ世界大戦による被害を知らないわけではないはずです。それなのに、戦争していることを「当たり前」だと思う世代を増やすつもりなんですか？

今の社会の「当たり前」をつくっているのは、周りの大人や環境です。今の私の考え方も、平和学習や、普段の会話を通してできた考え方です。しかし、いくら環境だと言っても私達が環境をつくるには限界があります。何か言うにしても、中学生が言うのと内閣総理大臣が言うのでは、当たり前ですが重みが違います。もちろん、中学生が言うことで説得力が増したり、刺さったりすることもあるけれど、それはごく一部の事例に限られます。実際問題、今の私達にできることはそう多くはありません。

ですが、10年後、20年後に社会を動かしていくのは私達です。私達には、戦争を知っている世代が身近にいません。これから戦争が起こらない限りは、私達が大人になるころには、日本では社会全体でもほとんど、もしかしたら一人もいないかもしれません。それは幸せなことであり、また危険なことでもあります。だからこそ、悲惨な出来事を繰り返さないために、今の平和を、「当たり前」を引き継いでいかなければなりません。

今、私は戦争や紛争が世界で起きていることに心を痛めています。私が大人になるころに、日本が当事者になっていないといいと思います。日本では、今戦争や紛争に直接関わってはいませんが、世界のどこかでは起こっています。「二度と戦争を引き起こさない」。いつか、日本のこの感覚が、世界中で「当たり前」にできるように、一人ひとりが努力していくことが大切だと思います。